



ピッポ新聞

2012

5

No.262

子どもの本専門店 ピッポ

ピッポ古書クラブ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3
TEL & FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>
E-mail itoh@pippo.co.jp

スイスの山にのぼりたいな!

(その2)

動き出した旅の予定

準備や計画というのは、あれやこれや考えだすときりがなくなるものだ。人によってその仕方にもさまざまで、山仲間のなかには山行の数日前には準備万端、そのすべてを整え終わっているものもいれば、ぼくのように出発の直前になってザックに山道具を詰め、「あつ、あれがない!」などと探し回り、あげくにカミさんの手を煩わせるものもいる。

かの「準備万端氏」が山行計画を立てると(彼が仲間のリーダーでもあるからたいがい山行の立案もする)数日前には「伊藤さん共同装備として をお願いします」と、計画書とともに言い渡されるのである。実に手際もよいのだ。

さて、スイス山行だが、いまだその細部までは決めかねている。今度ばかりは、普段の山登りのように、出発の前の晩に荷造りすることや、行動予定を決めるといっわけにはいかないように、それでは事前にホテル予約もできない。出発日と帰着日がきまっているのだから、その中を埋めるだけでよいのだが、旅行案内書やネット上の登頂記などを読むうちに「あの山も、このハイキングコースもいつてみたいな」と迷いにまよっている。

登ろうとしているスイスの山は、季節が夏だと

いうのに一部日本の雪山の装備が必要だということだから、山道具もある程度事前のチェックが必要だ。

そこで思い出したのは、一番肝心の登山靴が一年前の冬、ハケ岳登山のおり劣化によって壊れてしまい、いまだ新しい靴を持っていなかった。

それと、現地の山岳ガイドとロープを結ぶためにハーネスも必要だ。渓流釣りに夢中になっていたところは、懸垂下降のための必需品だったから当然もっていたのだが、あるとき釣仲間に貸してやったらそれっきりで、もう何年も戻ってこない。これもあらたに買わなければならぬだろう。点検するとけっこうでてくるものだ。

そこで、神田の古書の市場にいったおり、登山用品店で購入することにした。ねんのためにアイゼンを持参して買う靴と合うかどうか確認してもらうことにした。前回プラスチックブーツでは苦い経験をしているので、今度は革製にしようと考えていた。

いくつか見て、店員にすすめられた靴が履いた感じもよく、これに決めようとしたのだが、持参したアイゼンをあわせてみて店員は「これはちよつと合いませんね、アイゼンの形が古くてこれだと歩行中に外れてしまう可能性があまりますよ」と言うではないか。「うーん、どうしよう?」そしたら、店員はすかさず「お客さんの持ってきたメーカーと同じメーカーのもので、この靴にぴったりのアイゼンがありますよ」と、このさいだからアイゼンも新調しろというのである。

続いてぼくは「あの、ズボンも、もう二十年以

上はいているウールのもので、むれるので新しいのをとおもっているのだが」というと、「それもいいのがありますよ。イタリア製でヨーロッパではこれが主流だよ」だって、ぼくは単純だからこういつのに弱いのだよね。

そこでおすすめのままに購入した。登山靴の6万7千円を筆頭にハーネスも入れて、なんと十二万円を超えてしまった。カミさんの顔がチラッと浮かんだが、まあいいか。靴とアイゼンがフランス製で、ハーネスがドイツ、ズボン(最近ではパンツというのだそう)がイタリアと、いでたちのすべてをヨーロッパでかため、登る山がヨーロッパアルプスで、そして、使用するのが六十六歳の日本のダサイ親父だ。ここで昔の喜劇役者「エノケン」の歌った歌を思い出した。

オレは村中で一番
モボだといわれた男
うめぼれのぼせて得意顔
東京は銀座へ来た
そもそもその時のスタイル
青シャツに真っ赤なネクタイ
山高シャツポにロイド眼鏡
ダブダブなセーラーのズボン
.....

これではもう、他人さまが見ればマンガそのものだろうな。

海外旅行へゆくには、旅行保険という

ものをかける人が多いと思うが、ぼくもそれをかけることにした。ホテルの予約のためについて旅行会社でもそれをすすめられた。そのさい、細かな注意書きを読むと、どうも目的に登山を含むと、普通の旅行保険ではカバーしきれないようである。

ようするに、ピッケルとアイゼンとロープを使用する山の場合は、別途に海外用の山岳保険に入らなければ、万が一の時(おもに遭難時の救助費用など)に保険金が出ないようなのだ。ネットでしらべてみるといくつかの保険会社でそれを扱っていた。

そこでメールでおおよその内容を示して問い合わせたところ、その返答は、山岳ガイドと一緒に登ることを条件に引き受けるということであった。中には単独で登ろうと考えていた山もあったのだが、その山は現地のガイドツアーに申し込むことにすると伝へ、大まかな予定表を提出したら、保険を引き受けてくれることになった。

17日間で1万6千円ほどである。これがアイガー北壁やヒマラヤのような山になると、保険料はぐんと跳ね上がるのだが、ぼくの目指す山はそんなに危険度が高くないのでこの程度の保険料で済んだようだ。

ブライトホルンやアリランホルンなら登れるかな?

出発は7月の9日で、帰着が23日(時差の関係で実際は24日)と決まっているのだから、このあいだをどう埋めていくかである。

最初は登ってみたいなと思っっている山が、どこに存在するのかさえわからなかったのだが、来る日も来る日も旅行書や登山ガイドを読んだり、ネットを見ていたらなんとかその位置関係がイメージできるようになってきた。そこで具体的な日程を組んでみることにした。

ぼくは旅行期間中に4千メートル峰に4〜5座は登頂したいのだが、経験者の山行記などを読むと、おもに悪天候が理由で登頂を断念したり、予定の変更をよぎなくさされているようである。だから、目指す山すべてに登頂できたならば、よほど幸運に恵まれたということだろう。なにより日程に余裕が必要なようだ。

大まかに登る山を決めたら、どこに宿泊すればよいかわかってきた。その結果ツェルマットに7泊、グリーンデルワルトに4泊し、最後2日はチューリヒ観光に充てるつもりだ。

ツェルマット滞在中に、ブライトホルン・カストール・アリランホルン・ヴァイスミースに、グリーンデルワルトではユングフラウとメンヒの4千メートル峰を目指すことにした。

これらの山はいろいろ検討した結果、スイスアルプスの4千メートル峰の中では比較的体力的にも技術的にもそんなに難しくなく、今のぼくでもたぶん可能であると判断した。本当はヨーロッパ最高峰のモンブランやアイガー、それと一番の憧れのマッターホルンといきたいところであるが、病み上がりでは、今はどう頑張っても無理な

ようである。さて、このうちいくつに登頂できるだろうか。

病み上がりといえば、先日3か月ごとの検診のうちに手術をしていた病院の先生に「スイスに山登りに行くのですが問題ありませんか？」と聞いたところ「少なくとも前立腺がんで死ぬことはありませんよ」と冗談を言われてしまった。そのうえで「何ら問題はありませぬ」というお墨付きをいただいた。

もう一人、こちらは主治医で、2か月に1回診ていただいている。T先生にも「地上より気圧の低いところへ行くのですが問題ありませんか？」とつかがったところ「大丈夫でしょう」ということだった。ちなみにこのT先生がぼくの「がん」を見つけてくれた先生だ。

二人の医師からお墨付きをいただいたのだから、医学的には問題はないのだが、どうもまだ体力が手術前の状態に戻っていないのが気がかりではある。手術前にはなんら負担を感ずることなく走っていた山道のジョギングコースであったが、今は何度走っても急坂は歩かなければ続かないのである。これがいまのぼくのちよっとした不安材料である。

ホテルの予約は何を基準に決めたらよいの？

「9日の午後6時半にチューリッヒ空港に着くから、この日はチューリッヒの中央駅

の近くに1泊して、翌朝ツエルマツトへ向かうことにしよう」・・・。

ようやく、予定表が少しずつ動きだしたようだ。つぎはホテルの予約である。

ツエルマツトに7泊、グリーンデルワルトに4泊チューリッヒ2泊はどんなホテルを選んだらよいのだろうか。

二つ星とか三つ星とかホテルにランク付けがあるのは承知だが、どのような違いが星の数を分けるのかはさっぱりだ。料金もホテルによつては、三つ星ホテルより四つ星ホテルの料金のほうが安いものもあるのだから、いよいよわからない。しかし、じっくりサイトをみているうちに、少し見えてきたことがある。

駅から近い場所にあるホテルは、値段が高い傾向にあるようだ。ところが、ここからが問題なのだ。同じような条件のホテルでも値段が倍近く開きがあるものもある。もちろん、こちらは安いホテルを探しているのである。このまま安いホテルを、ネットで予約してしまっても大丈夫なのだろうか。

そこで手数料を取られるが、旅行会社に出かけてホテル探しをしてもらうことにした。その方がもし問題が発生したときに旅行会社に文句が言える分、安心感ももてるような気がしたのである。航空券などネットですべて予約しておきながら、矛盾ではある。

条件は、なるべく駅から近いこと、風呂（最低シャワー）があること、朝食付きということ、かつ料金が安いことである。

到着の日に泊まるチューリッヒは、駅からなるべく近いホテルを探してもらったら、朝食抜きで1万4千円というホテルを紹介された。料金が少し高額なのと、朝食抜きという点が、こちらの条件と違うが、大きな荷物を抱えているのだから、駅から近い（歩いて6分ぐらい）ことを最優先にして初日はここに決めた。

最後の2日間もチューリッヒに泊まり、場合によってはベルンにも行って、亡命したレーニンの足跡をたずねてみたいのだ。とりあえず同じこのホテルを予約しておいたが、こちらはたぶんキャンセルして、現地で探してみることにしよう。

ツエルマツトで7泊するホテルは、駅から少し離れて（1キロ以上）しまうが、4星ホテルで朝食つき、1泊1万百円という。ここに7泊するのだが登山予定の内、アリアンホルンとヴァイスミースはツエルマツトの隣のサーズ谷にあるので、1泊か2泊はサーズフェイのホテルか、ヴァイスミースの近くの山小屋に泊まらなければならぬのだが、サーズフェイに大きな荷物を持つての移動の煩わしさ考えると、ツエルマツトのホテルもリザーブしておくことにした。

グリーデルワルトの4泊は、駅からすぐ近くで今度は2星だ。朝食付き1泊8千9百円だという。グリーデルワルトでも途中山小屋に1泊してユングフラウとメンヒをアタックする予定である。ここでも余分な宿泊料がかかってしまう。

4星ホテルと3つ星ホテル（チューリッヒ

のホテルはこれ3つ星)と2つ星ホテルの違いはなんだろう?

旅行会社から送られてきたバウチャー(予約確認書)をみると、4つ星の方には朝食はホットビュフェと書かかれていて、2つ星にはコールドビュフェとあったが、さて、この違いはどんなちがいのかな?

結局、旅行会社に支払ったホテル予約代金は、手数料(1件1050円)をいれ、15万2千500円だった。スイスは観光立国だから、物価が高いと聞いていたが、それを実感した。

(続く)

ねー、この本読んだ

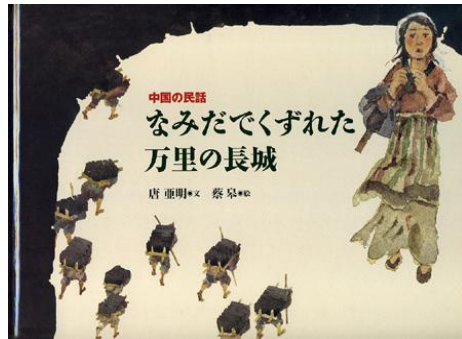
『あかちゃんかたつむりのおうち』(いとうせつこ・文 津島和子・絵 840円 福音館書店)



まもなく雨の季節がやってくる。雨を喜ぶ生き物のなかにカタツムリがいる。カタツムリの赤ちゃんはとても食いしん坊、はっぱや花をいっぱい食べます。それを見たテントウムシとチヨウチヨがいいま

した「そんなに食べると背中のお家に入れなくなっちゃうよ」……。幼い子がだきそうな、ちよつとした疑問に、じょうずに分かりやすく、自然にこたえていくのがいい。

『なみだでくずれた万里の長城』(中国の民話 唐亜明・文 蔡皋・絵 1890円 岩波書店)



宇宙から見るといって「万里の長城」は、隣国の侵入を防ぐために建設されたという。これはそれにまつわる悲しい物語

山奥の村に一人の若者が、長城建設の強制労働を逃れてたどり着いた。そこで村の娘と結婚したが、役人に長城の建設現場へ強制連行されてしまう。やがて娘は、夫を捜しに旅に出るが……。時の権力者がいかに民衆を犠牲にして万里の長城を築いたかの物語でもある。

しかしこの話、いくつかの昔話を合成して作ったようにも思われるのだが、皆さんのお考えはどうでしょうか?

『兵士のハーモニカ ロダリー童話集』(ジャンニ・ロダリー 関口英子・訳 756円 岩波少年文庫)



給料を落としてしまった兵士が歩いていると、老人が声を掛けてきた。ポケットの中味をお互い半分ずつに交換しようというのだ、不思議なことに兵士

のポケットから銀貨が一枚、老人からは小さなハーモニカが出てきた。ハーモニカを持って帰路についた兵士が遭遇した災難時、ハーモニカを吹くとふしぎなことが……。表題作のほか全部で18編の短編を収録。話の内容や行間からお話しの豊かさが溢れてくる短編集だ、よく読み聞かせにどんな本がよいか尋ねられることがあるが、この本もお薦めの一冊だ。

『ケイト・グリーンナウェイ ヴィクトリア朝を描いた絵本作家』(川端有子・編著 1680円 河出書房新社)



イギリスの絵本の黄金時代の一人、グリーンナウェイを知るために